

島のむんがたり

く闘牛の敗北の
苦い記憶と家の「誇り」く

戦後も間もない昭和20年代前半、現在の伊仙町古里に「全島一」と評される闘牛がいました。

その牛は手々集落から買われ、迎えるにあたっては、朝まだ明けぬ暗い時間に手々まで行き、日も落ちた夕刻に帰ってきました。

家では前評判の高い牛がやってくるからと親戚や集落の人々が待ち構えており、迎えの一団が到着すると、人々は太鼓やラッパを鳴らして出迎えました。

牛の名は家の姓にちなんで「大村号」と呼ばれるようになり、のちに地元の面縄浜などで行なわれた牛なくさみでは、その力を遺憾



【尾母闘牛場での仕切り（昭和25年1月撮影）】
水野修氏編の『ザ・闘牛』には、加川徹夫氏撮影の
写真が掲載されており、双方の雄姿がうかがえます。

なく発揮し、全島大会での活躍に大きな期待が寄せられました。

しかし、そんな「全島一」にも敗北のときが訪れました。

尾母闘牛場に向け取組の一週間前に集落を出発。見送りでは多くの人々が激励し、道中でもはやし立てられ、到着後はヤドの小屋で世話をされました。

対戦相手は島内でも有名な強敵「アウガン牛」。取組が始まってから間もなく、大村号は相手の突進にひっくり返され、お腹を上にして四本の足をばたばたさせたといえます（当時観戦していた方々はこの負け方をよく覚えていました）。取組後、牛は持ち主によって沖縄に売り払われたそうです。

今日、「大村全島一」という名が一部のお年寄りたちに記憶されるとともに、かつての牛主の屋敷のオモテの長押（なげし）には、牛主とご子息（現当主）、それに縄で引かれた牛が写った写真額が飾られ、牛主たちの誇りがうかがい知れます。

（町誌編さん専門員

大村達郎）

問 郷土資料館

☎ 0997-182-12908